



©まなびの広場 令和7年12月10日発行
偶数月10日発行
令和4年6月10日創刊 通算No.22

12
2025

まなびの広場

— 子どもの未来を共に考える —
VOL.22

編集よりご案内

幼児教育実践学会がスタートして15年が経過した今、学会と幼児教育の社会的意義をより一層高めることを目指し、学会誌を創刊することとしました。本号ではその第一歩としてダイジェスト版を掲載します。

明和政子氏による短期連載2回目では、乳幼児期のアタッチメントがどのように成立し、その後のヒトの発達にどう影響を及ぼすのかについて最新の科学的知見に基づいてご執筆いただきました。

また、3回目となるECEQ®実施園の声では、活動を開始した1年目から5年目の若い保育者の活躍を促す取り組みについてご執筆いただきました。

CONTENTS

短期連載②

AI時代を生きる子どもたちへ

■ 明和 政子氏 (京都大学大学院教育学研究科 教授)

(一財)全日私幼研究機構理事長からのご報告

森のくまさんが 街に現れる

■ 安家 周一 (一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 理事長)

私たちの豊かな実践 幼児教育を支えるもの

幼児教育実践学会学会誌2025 ダイジェスト版

ECEQ®実施園からの声～ECEQ®の旅で手にしたもの

■ 関口 智行氏 (山王幼稚園 園長)

ECEQ® Hot News Vol.5

機構からのお知らせ

●令和7年度第3期オンデマンド研修32コンテンツが新たに加われました!

幼児期のアタッチメントは巣立ちの始まり

京都大学大学院教育学研究科 教授／明和 政子

ヒトは哺乳類の一種です。生後生き延びていくためには、誰かから栄養を与えられることが不可欠であることは言うまでもありません。しかし、それだけでは十分ではありません。常に世話をしてくれる「ある特定の誰か（養育者）」との身体的なふれあいを通して、「アタッチメント（社会的絆）」を形成する必要があります。

アタッチメントの重要性については、すでに多くの方がご存じだと思います。しかし、そのアタッチメントが子どもの脳内でどのように形成されるのか、その仕組みについてはいまだ十分に理解されていないのではないのでしょうか。そこで今回は、アタッチメントがどのように成立し、どのように機能するのかについて最新の科学的知見に基づきお話しします。こうした理解を深めていただくことで、今の時代に求められる幼児教育の意義と役割が、より鮮明に浮かび上がってくると思います。

* * *

「密・接触」なしには生存できないヒト

哺乳類の身体には、内部の生理状態に急激な変化が生じた際、それを一定の範囲内に保とうとする働きがあります。これを「ホメオスタシス」と呼びます。さらに、より大きな変化が起こると予測される場合には、事前に安定した状態へ戻そうとする「アロスタシス」と呼ばれる生体システムが働きます。たとえば、暑い日に脱水症状になる前に水分を摂ろうとする行動がその一例です。

しかし、ヒトを含む哺乳類は、生後しばらくはアロスタシスを自ら働かせることができません。そのため、生理状態が崩れたときには養育者によって外側から調整される必要があります。お腹がすいて泣けば、授乳される

ことで血液中のグルコース（ブドウ糖）が上昇し、生理状態が回復します。ぐずれば、養育者がやさしく抱いてくれることで、オキシトシンなど精神を落ち着かせる内分泌ホルモンが分泌されます。つまり養育とは、未熟な個体の生理的な乱れ（体温・血圧・覚醒・睡眠・血糖値などの変化）を、身体を介して安定した状態へと回復させる営みにほかなりません（図1）。

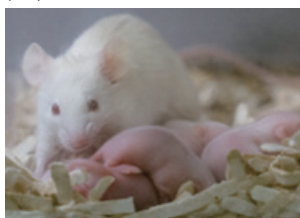
「アタッチメント」とは何か

養育者との身体的なふれあいは、子どもの内臓に「心地よい感覚（内受容感覚）」をもたらします。この点は、ほかの哺乳類や一部の鳥類でも共通しています。しかし、ヒトの発達を考えるうえで特に重要となるのは、養育者からの働きかけが子どもの生理状態の調整にとどまらない点です。

不思議なことに、ヒトは子どもの生理状態を安定させる際に、「おいしいね」「気持ちいいね」などと声をかけ、目を見つめ、微笑みます。こうした積極的な働きかけは、ヒト以外の哺乳類では決してみられません。ヒトは生後直後から、視覚・聴覚・触覚・嗅覚といった五感情報（外受容感覚）を養育者から絶えず受けながら育つのです。

こうしたユニークな養育は、ヒトの脳の発達に直接的な影響を及ぼします。先述のように、子どもは抱かれ、授乳され、触れられることで、内臓に心地よい感覚が生じます。重要なのは、その心地よさが高まったまさにそのタイミングで、養育者から視覚・聴覚などの情報を受け取っていることです。こうした経験を日々積み重ねると、子どもの脳内では、養育者の顔（視覚）や声（聴覚）、匂い（嗅覚）、肌ざわり（触覚）などの外受容感覚が、内臓で感じる心地よい内受容感覚と統合、記憶されます。これを「連合学習」といいます。

(※1)



(※2)



(※3)



図1 哺乳類の一種であるヒト(※3)は、げっ歯類(※1)や霊長類(※2)と同じく、生後は「密・接触」なしには生存することすらできない(明和, 2019)。

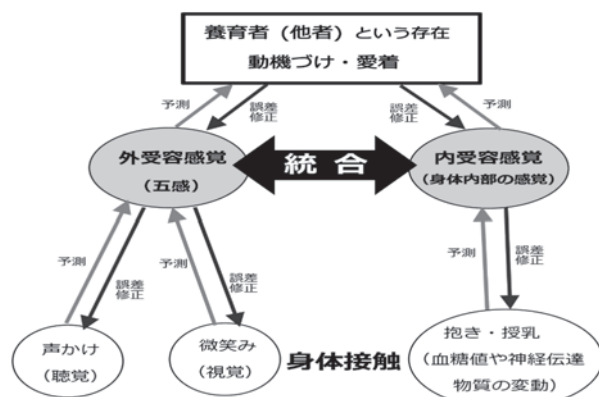


図2 ヒトは「ある特定の誰か」との身体経験を通して、アタッチメントを脳内に形成していく(明和, 2019)

この記憶が形成されると、養育者の顔や声、匂いなどを経験するだけで、さらにはそれらを思い浮かべるだけで、内臓の心地よい感覚が湧き立つようになります。これが、アタッチメントが形成されていく仕組みです。これを理解すれば、子どもにとってのアタッチメント対象は、母親や血縁者に限定される必要がないことがお分かりいただけるでしょう。内臓に心地よさが生じるタイミングで安定的に関わってくれる「特定の誰か」が存在することが重要なのです（図2）。

幼児期に始まる巣立ちの準備—社会性の発達

生後しばらくは、ある特定の誰かとのアタッチメント関係の土台が築かれる時期です。そして幼児期に入ると、その基盤の上にアタッチメントの対象が少しずつ広がっていきます。

幼児期になると、集団生活において互いに身体を寄せ合い、じゃれ合うように遊ぶ姿がよく見られます。大人からすると、なぜそこまでくっつくのだろうと不思議に思えます。しかし、こうしたふるまいには、生存をかけた重要な意味があるのです。

子どもは、温かく守られた巣（家庭）から、いつかは自立していかなければなりません。その準備として、複数の他者と身体をくっつけてオキシトシンを高め合いながら、笑顔や声を交わし合っているのです。集団内でのふれあいを通じて、子どもたちは「いつでもくっつける誰か（アタッチメント対象）」を、社会の中で一人、また一人と増やしていきます。まさに、子どもが少しずつ自立へと向かっていく姿そのものです。

幼少期の身体を介した他者との経験は、その後の発達にも大きな影響を及ぼします。思春期には、新しい世界への挑戦や本格的な巣立ちが強く求められます。そのときに不安が伴うのは、ごく自然なことです。しかし、「いざとなれば、いつでもくっつける」という脳内の記憶があれば、その不安を乗り越えることができます。この精神的基盤は、幼少期に積み重ねられた身体的・社会的なふれあい経験によって育まれるものなのです。

ポストコロナ時代に求められる幼児教育

「Society 5.0」という言葉をご存じでしょうか。こ

れは、日本が掲げる未来社会の構想で、サイバー（仮想）空間とフィジカル（現実）空間を高度に融合させることで人とモノが密接につながり、人間中心の社会が実現されるというものです（内閣府「科学技術・イノベーション」参照、図3）。



図3 サイバー（仮想）空間とフィジカル（現実）空間を融合させた人間中心の社会「Society 5.0」（内閣府HP、科学技術政策Society 5.0）

コロナ禍がこれを一気に加速させました。今、私たちはサイバー空間で多くの時間を過ごすようになり、その空間で他者とつながることも当たり前となりました。

しかし、ここで改めて強調したいことがあります。ヒトは、他者との密な身体的接触を前提とする環境に適応、進化してきた生物であるという事実です。環境は劇的に変化しても、私たちの脳や身体は人類史上変わっていません。とくに、幼少期の経験はその後の脳やこころの働きに大きな影響を及ぼすことを考慮すると、大人には一見無駄に思えるような豊かな身体的ふれあいこそが、この時期には必要なのです。

生まれたときからデジタル空間で生きることを当たり前とする世代、Z世代が親となる時代を迎えました。多様な人々とふれあい、身体経験を基盤とする幼児教育の意義は、かつてないほど高まっています。次世代人類にとって、ヒトがヒトらしく育つための支柱は幼児教育にあるといっても過言ではないでしょう。

* * *

今回は、幼児期の発達に大きく影響する腸内環境と食生活習慣についてお話します。

引用文献

ヒトの発達の謎を解く—胎児期から人類の未来まで 明和政子著（ちくま新書）筑摩書房 2019

床メンテナンス・張替え対応

あらゆる技術で、園の床に起こるさまざまな課題を解決！

園舎の健康診断
園舎診断アプリ

園舎管理もプロにアウトソーシングする時代！
園舎管理を「属人化」から「仕組み化」へ

修繕計画のセカンドオピニオンとして活用しませんか？

園舎管理 保育DX

株式会社 エコテック

株式会社 エコテック

フリーダイヤル 0120-963-093

全国対応

安全 健康とケガ（ササクレ）のリスクに備える ※コーティング種類による
歩きやすく転びにくいノンスリップ仕様

負担減 清掃負担軽減 維持費負担軽減

日々のワックスがけは時間的にも体力的にも負担がかかりますがコーティング施工済みの床なら職員の方の清掃やメンテナンスの負担を軽減できます。

施工イメージ
安全安心の技術
対応エリア全国

before after

令和7年度 積極受付中

森のくまさんが 街に現れる

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

安家 周一



野外活動やキャンプ、保育の現場でも「森のくまさん」という歌がよく歌われています。特にキャンプファイヤーを囲みながら、「ある～日♪もりのなか♪」とリーダーの言葉を後追いし歌う楽しい歌で、くまさんがお嬢さんに注意を呼び掛けるような物語的に進行していくのも子どもたちには人気です。

近年、あちらこちらで森や里山から街に熊が出没するニュースが多く、「街に熊さん」の危険が迫ってきています。鹿を襲って食べていたり、人にも襲いかかり、何人も人が亡くなり、死には至らなかったけれども、顔や体を爪で引っかかれ、大けがを負われた方が発生していると報道されています。その影響もあって、軽登山や郊外への遠足・園外保育なども自粛されているようです。気持ちの良い秋の季節にハイキングに出掛けられないのはとても残念なことでした。

野生動物の行動の大きな変化には往々にして人間の影響が反映されます。私の住む大阪府の北摂には身近に「箕面の滝」という風光明媚な観光地があります。年中行楽客が多く訪れる人気のスポットですが、人が猿に食べ物やおやつを与えるために道路などに出てきて、車のボンネットの上に乗る、攻撃してきたりお菓子をねだるなどの行動がみられていました。管理している行政から食べ物を与えないようにアナウンスもあります。また、大きな爆発音で脅して猿を山奥に追いやる活動の効果があって、このところ猿はあまり見かけなくなりました。

この度の熊の出没の大きな原因は、山のどんぐりや木の実の育成が悪く、お腹いっぱい食べて冬眠に入るはずの熊が、空腹を満たすことができないため、人里に現れ、残飯や柿の実、栽培されているリンゴなどの果物を荒らしていると言われています。通常では市街地での鉄砲の発射は危険を伴うため禁止されているのですが、警察も出動し、ライフルで緊急銃猟が実施されるようになりました。

このニュースに接したときに、400年ほど前に地球上で起こった「産業革命」による環境破壊の影響は否めないと思いました。私たち人間の便利で快適な生活を優先するために化石燃料を使用し、二酸化炭素などを排出し続けた歴史を後戻りさせることは難しいのですが、現在も温暖化は加速度を増して伸長し、環境がゆがめられています。私たち一人一人が原因を作った当事者なのです。

もう一つ熊の出没の大きな原因と言われているのが、里山の手入れ不足です。50年ほど前までは、秋の稲刈

りが終わった農家は山の手入れにいそしみました。山の枯れ枝を集め、樹木の枝打ちをして風呂焚きの燃料に使用するため山を管理していました。落ち葉は集められ、堆肥がつくられます。化学肥料ではなく、家畜のし尿などと混ぜ合わせ自然の栄養を田畑に漉き込み、肥やしにして作物を育成させる、日本の循環型農法でした。

現在では後継者の不足などからそのような手間のかかる農法は敬遠され、農地は大規模となり、高価な高性能の農機具を使った農業が推奨されているようです。結果的には里山の手入れがなされることが減り、里に野生動物を引き込むことになっているのではないかと考えられます。

以上の2つの大きな要因のために、このような熊による被害が多発する事態が発生していると考えられますが、この問題は農業政策だけの問題ではなく、人口・産業・都市計画や家族の在り方、自治体行政などが絡み合った大きな枠組みの問題なのでしょう。都市圏に集中する人口問題でさえも解決の糸口は見えていない現状の中で、害獣の駆除だけが推し進められ、結果的に「ニホンオオカミの絶滅」の二の舞いとなることがおぼろげながら見え隠れします。ニホンオオカミが絶滅した影響は、山の鹿の爆発的な増加を引き起こし、鹿による農作物への被害が絶えません。

緊急的な処置としての害獣駆除は必要ですが、それだけに注力するのではなく、人も熊も穏やかに共存できる、総合的な自然環境の保持を期待したいですし、子どもたちの保育活動に、自然との共存をテーマにしたセンス・オブ・ワンダーに励み、未来の人たちから「良き祖先に恵まれたんだ」と感じてほしいと願います。

園庭を森のようにして、子どもたちの心に種子をまきましよう。

参考文献

センス・オブ・ワンダー レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 新潮社 2021
グッド・アンセスター わたしたちは「よき祖先」になれるか ローマン・クルツナ
リック著 松本紹圭訳 あすなろ書房 2021

私たちの豊かな実践

幼児教育を支えるもの

幼児教育実践学会学会誌 2025

保育現場での実践を踏まえ、発表は事例を用いて、現場にフィードバックできることを念頭に研究会では参加者同士が活発に意見交換を行う

生きた研修のメイキングの仕方を学び、全ての園の園内研修の充実を目指す

保育実践者と研究者が共に育ちあう

幼児教育実践学会の3つの柱

2010年、幼児教育の実践を豊かにし、幼児教育の有用性を社会に示すことで、子どもの育ちが最優先される社会が実現されることを目指して「幼児教育実践学会」がスタートしました。15年が経過した今、この思いをさらに広く社会へ伝えるために学会誌編集を念頭に、このたびはダイジェスト版にて皆様にお届けいたします。

第1章 はじめに ～学会誌ダイジェスト版発刊に寄せて～

(一財) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 理事長 安家 周一

当機構の幼児教育実践学会も16回の開催を終えました。多数の申し込みに応えきれない状況も生まれるほど注目され、主催者として、申し訳なさと共に大きな喜びを感じています。時宜を得た基調講演や園内研修のメイキングに加え、各園が地道に積み上げた口頭発表やポスター発表も盛んにおこなわれ、回を追うごとにその内容の充実には目を見張ります。保育の質を向上させたいという熱意と、講演や各園の発表に続く質問や意見の交流からも参加者の積極的な意欲が感じられます。ひとえに会場を提供いただけている各大学法人への感謝と、各園の保育レベルの上昇を支える大学などの研究者方のご助力のたまものと、感謝しております。

また、日ごろ現場で保育を担う保育者が、研究者との交流を通して、様々な角度から保育の営みを考える機会となっており、とてもありがたいことだと考えます。

しかし、現在のところ本学会は研究者の学位向上のためのポイントにはならないという現状があります。今後公に開かれた学会としてのプロセスを歩むかどうかについては、熟慮が必要ですが、少なくとも皆様方の努力の結晶である各口頭発表やポスター発表を記録として編纂し、参加することができなかった園や、各種関連機関に対しても公開することは必要ですし、ご希望の方に頒布することも必要であろうと検討を進めてまいりました。

学会誌発刊の目的は、幼児教育実践学会の存在を広く社会に周知することとともに、幼児教育の実践の豊かさを社会に示し、子どもを育み・育まれる価値を共有することによって、子どもの育ちが最優先される社会の実現を目指すためのものです。

そのようなことからこの度「第16回幼児教育実践学会学会誌ダイジェスト版」として編纂しまとめたところです。これから完成度を高めるところではありますが、学会誌発刊への第一歩としての現場保育者の意気込みと、研究者の貴重な助言の一端をお知りいただければ幸いです。

今後とも、(一財) 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構へのご助力を賜りますようお願いいたします。

大妻女子大学家政学部児童学科 教授 岡 健

第14回幼児教育実践学会において、「保育における『研究・臨床・教育』をどう考えるか～『臨床』を担う幼児教育実践学会への大いなる期待～」と題して基調講演をさせていただきました。その折に念頭にあったのは、保育の研究や実践を巡り、医学・医療における取組との比較でした。

例えば医学・医療においてイメージされる「研究」は、いわゆる学術的で基礎的な知見を見出す営み。患者との相対というよりもむしろ、病気の原因(要因)を究明するというイメージ。それに対し「臨床」は、まさに患者に向き合い、病気を治療するというイメージです。そして「教育」。これは言われるまでもなく医学・医療者を育成する営みということになるでしょう。では、保育で考えた場合どうなるのでしょうか。

保育の歴史、哲学、発達、制度、方法…、におけるさまざまな知見、いわば教科書に載るような知見。これらはまさに「研究」の成果をイメージするでしょうし、その産出機関こそが大学等の研究機関ということになるのでしょうか。対して、直接「子ども」と向き合う(=「臨床」)ことで産出される営み。それこそが保育実践現場でしょうか。では「教育」は?

字義通りに捉えれば、それは「養成校」になるのでしょうか。なぜならば「養成校」は「養成」を冠に掲げ、「教育」を主目的とする機関なのですから。では、決して少なくはないと思われる「養成校」において、例えば、責任実習に対する指導案指導と称し、おそらく現場では二度と同種の書式で書かれることのない指導案指導をしている実態をどう考えればよいのでしょうか。実践現場とは無縁の「保育」を教えることは、診断抜きで薬の処方を教え、治療と必ずしも結びつく保障のないスキルや手法を伝える、ということにはならないのでしょうか。

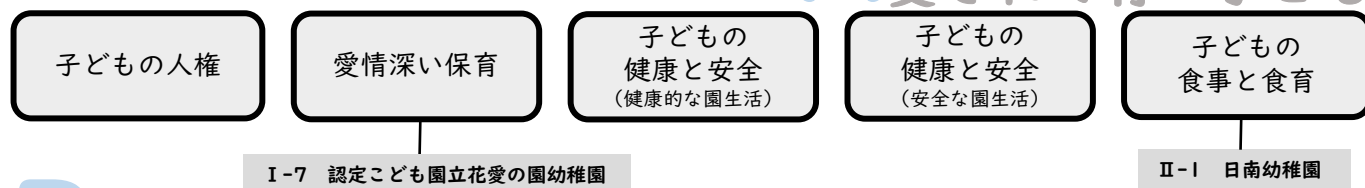
看護学部の教員の大半は元看護師だそうです。また医学部における「臨床」の教育も、基本的には臨床医としての専門性を有した医師によって教えられます。そう考えると、保育実践者(「臨床」当事者)が養成者となることはむしろ当然ではないかと私は思います。

今日の保育者不足、否、養成校への入学者減少問題は、むしろこれまでの「養成(教育)」の在り方に対する、問題提起とは考えられないでしょうか。幼児教育実践学会において、口頭発表やポスター発表が実施されるだけでなく、学会誌を刊行し、そこで実践研究論文(「臨床」研究)が掲載されることに多くの期待を寄せています。なぜならば、それは養成者への道が拓かれることに繋がると思うからに他ならないからです。

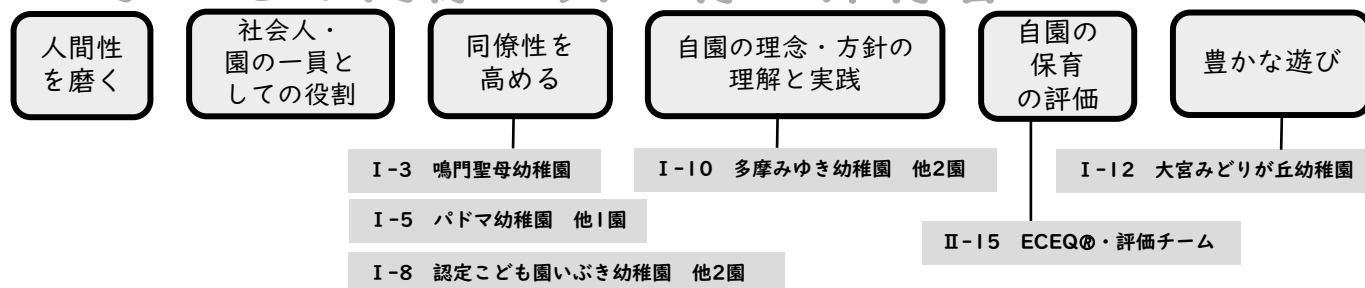
第2章 口頭発表研修俯瞰図

■30の口頭発表の現在の課題や研究テーマが、研修俯瞰図のどこに位置づくかという視点で再整理しました。

A 愛されて育つ子ども

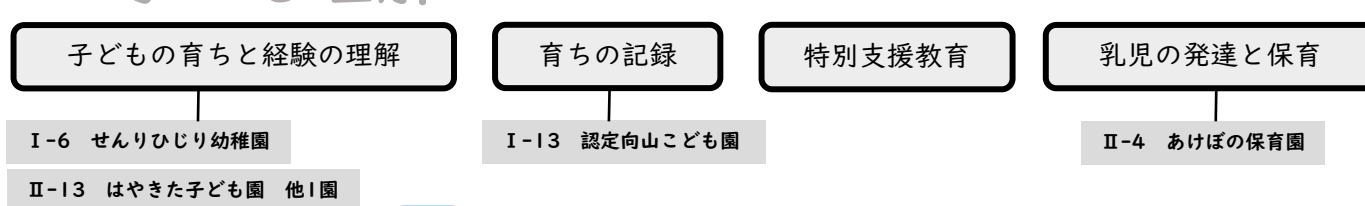


B 子どもや同僚と共に育つ保育者

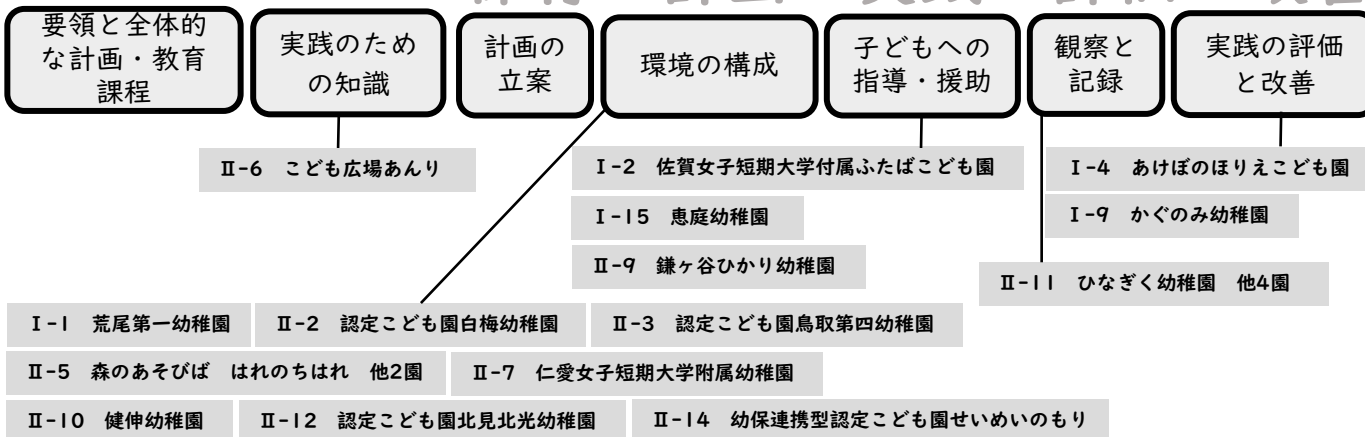


C 幼児教育・保育理論

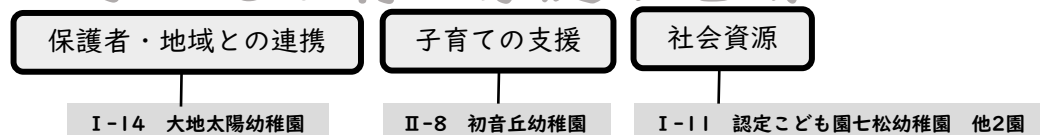
D 子ども理解



E 保育の計画と実践・評価・改善



F 子どもが育つ家庭や地域



口頭発表企画趣旨概要はこちらから



第3章 発表報告

私たちの実践を口頭で発表！

豊かな感性育てを目指す実践の振り返りから架け橋期への願いと試み

【発表園】学校法人坂本学園 大地太陽幼稚園

【発表者】中山敦子、前園和寿、高橋春香

【共同研究者】平野良明・札幌国際大学名誉教授／北海道教育委員会幼児教育推進センター
アドバイザー

1. 研究要旨

幼児期に育みたい資質・能力、10の姿を園の特色ある活動である「森のあそび」において考察し、架け橋期への提案に結びつけて実践事例を紹介しました。春先にどんぐりから伸びた小さな芽が森の木になることを知った年長児は個々の感性に基づく知的好奇心・興味・関心から探究活動を始めました。そして「森は大切」の想いをこめて、自然と共生する暮らしを育てる「森を育むプロジェクト」活動に発展させました。この学びへの意欲が、小学校にも繋がることを願い、市内の自然環境をフィールドとし、体験型の幼小合同研修会を行いました。

2. 学会当日フロア参加者からの意見・質問内容

「質の高い教材」について考えるきっかけをもらいました。／小学校の先生と一緒に教材研究をすることは考えてもみませんでした。／地域の自然をフィールドに、幼小の先生と一緒に植物採集、昆虫採集をして一緒に教材研究をするのは楽しそうだと思います。／植物採集の事例から幼稚園の絵や創作だけでなく、小学校の生活科・図工・算数・国語の教材を発見できるのは素晴らしいと感じました。／架け橋期の取り組みにヒントをもらえました。／「どのように小学校や教育委員会の協力を得て研修会を実施したのか、また周知期間を教えてください」⇒教育委員会へ研修の具体案や必要性と架け橋期の願いを説明し、ご理解と市内小学校へ参加推進のお願いしたところ2週間の短期間でしたが、実施することができました。

3. 共同研究者からの助言等

本研究を通して、日々の「環境を活かした自然体験」「体験を踏まえた表現活動」等の教育活動が「質の高い幼児教育」の流れにあることが自己評価できました。その上で「幼児教育の重要性」と「架け橋期の教育」の大切さが問われる今日、「本園で生き活きと育った子どもの中に、小学校入学後に不登校になる子がいる」という現実に向きました。園での「やってみたい」が小学校においても継続・発展することを願い、架け橋期の教育を幼小教員で研究したいと語り合い実践・発表した本事例、幼小教員の共通体験は可能性に満ちています。

私たちの実践を口頭で発表2

「子どもが夢中になって遊ぶ環境づくり」

～子どもも大人も楽しいがいっぱい！明日もやろうでー！～

【発表園】学校法人鳥取学園 認定こども園鳥取第四幼稚園

【発表者】平田都、高橋梓

【共同研究者】佐々木晃・国立大学法人鳴門教育大学大学院教授

1. 研究要旨

一斉保育後に、「先生遊んでもいい？」と尋ねる子どもの姿から主体性が十分発揮されていないことを感じ「子どもが夢中になって遊ぶ姿」の実現に向けて、主体性を促す4つの視点（Well-being を満たす関係性、思いが実現できる自由な環境、遊びと行事がつながる指導計画、職員ミーティング）を基に、仮説を立て研究に取り組みました。その結果、子どもの主体的活動を促すために子どもの関心に沿った活動や遊びができる環境の構成をすること等、保育の在り方を見直すことで、安心感や意欲が育まれ「夢中になって遊ぶ」姿へと繋がりました。

2. 学会当日フロア参加者からの意見・質問内容

3つのテーマでグループディスカッションを行い、情報共有を行いました。「テーマ1:子どもが主体的に遊ぶ姿」より、子どもの得意が遊びに発展し自信となり、自分で環境を整えたり調べたりして遊びを展開できていると感じています。「テーマ2:遊びと行事の繋がり」より、行事の名前を変えたり、子ども達の声や遊びの姿から行事に絡めたりして工夫しています。「テーマ3:職員間の情報共有」より、全職員で集まることが難しい為、ICTやワークスを活用しています。

「決められたことが多い中での時間の作り方は？」の質問より、本園では遊びの姿を行事や活動に繋げ「子どもが決めたこと」とし一緒に進めています。また、書類等は、ICTにできるものは簡素化・必要かどうかを管理職に相談しています。

3. 共同研究者からの助言等

「研究の仮説」を柱に日常の保育を省察、考察し、課題と成果が見える化しています。R-PDCA モデルを活用し、4つの視点を基に「子どもの姿」による評価を設定、視覚化を図る取り組みは保育の質の向上に繋がります。主体性の根っこにある自己肯定感や自尊感情の育成には保育者の非認知能力が重要であり、ポジティブルールを活用した保育は主体性を引き出す有効な手立てとなります。実践の中では、環境の構成・幼児理解・環境の再構成を繰り返し、よりフィットした援助と環境に作り替えていくプロセスがとても大切です。

私たちの実践をポスターで発表！

「今、私たちに何ができるか？！」

幼稚園×保護者×地域で子ども達の健やかな成長を育むためには…

【発表園】 学校法人菅藤学園 南山形幼稚園

【発表者】 風呂哲平、尾形亜希子、齋藤凜音

1. 研究要旨

現在、核家族や共働きの増加、SNS等の普及に伴い、両親が家庭で過ごす時間や子どもと関わる時間の減少と共に、地域社会との連帯感も希薄になっていると感じます。家庭と地域社会の教育力を向上させ、幼児教育の充実を図り、こどもをまんやかにそれぞれの役割（教育）を果たし、地域社会全体で子どもを育てるという意識を高め、子育て支援のネットワークを拡げていきたいと考えています。そのためには、「幼稚園はどのような関わり・役割を担う事ができるのか」を問いに、これまでの当園の取り組み（家庭＝園・地域＝園・家庭＝地域）を振り返り、言語化を行いました。そこで見えてきた保護者との関わりや地域との関わりから、子ども達の成長する姿を追いました。

2. 学会当日フロア参加者からの意見・質問等自園の気づき

今回のポスター発表を通して、参加された先生方との対話を振り返りまとめみると、①地域との繋がりのきっかけやアプローチは②行政（教育委員会）との関わりは③保護者との共通理解の進め方は④連続した持続的な活動にしていくためには等、と多くの貴重なご意見をいただきました。これまで当園が実践してきた「まず行動してみる」「子ども達の声から繋がり・興味・関心を広げていく」具体的な事例を基に、各園それぞれの取り組みや今悩んでいること（幼保小連携や地域への接続の手立て）、先生方の子どもへの思いをどう実践に反映し行動していくことが出来るかを語り合えた、充実した有益な機会となりました。

また、ポスターを仕上げていく過程で、アンケートやこれまでの活動を振り返り「自分事として物事を捉えていくこと（園も先生も子ども達も地域も）」、みんなが一つ一つの活動の意味や意義を理解し、丁寧に実践を積み重ねていくことで「相似形として活動が発展していくこと」が出来てきていると実感しました。「取り組み」を振り返りながらまとめ、言語化し「幼児教育実践学会」での「ポスター発表」を通し、全国の多くの先生方と、活動内容や連携の重要性を共通理解出来たと共に、今後も、一つ一つの関わりや実践を丁寧にそして「今できることは何か」を常に考えながら、子ども達・先生・保護者・地域のそれぞれの思いを紡ぎ「継続していくこと」を中心となる課題に据え、引き続き取り組んでいきます。また、多角的な視点を持つことで、物事の本質や背景を理解し、今後の自身の成長や社会への貢献に繋いでいきます。

私たちの実践をポスターで発表2

続・ちょうどいいってどのくらい？

～生活は加減であふれている？～

【発表園】 学校法人鴨居学園 認定こども園かもいようちえん

【発表者】 桑原紀子、高木玲奈

1. 研究要旨

子ども達の虫との関わり方をきっかけに「加減」について考えた一昨年からの継続研究です。保育の場で日常的に目にする力加減だけでなく「心理的な加減」や「自分自身の身体をコントロールする加減」等、多くの加減を探ることで、3歳児の「本能的な加減」4歳児の「体験的な加減」5歳児の「意識的な加減」の存在が明らかとなり、また、事例研究を重ねることで年齢による差や経験量による、加減行為に発達の違いが見えてきました。今回の研究は経験が増えることで、この加減行為は「明らかな変化」及び「経験知」となっていくのかという更なる疑問から始まっています。

「人との関わりの中に存在する加減」を各年齢のエピソード記録を通じて探ることで「ちょうどいい」は一つではないという気付きへとつながっていきました。

2. 学会当日フロア参加者からの意見・質問等自園の気づき

発表テーマに含まれる「ちょうどいい」・「加減」というキーワードに多くの先生が関心を抱きご覧いただけました。問答するなかで先生方の「加減」に対するイメージは次にあげるように大きな幅がありました。

子どもの姿や行動を「加減」という視点で見ることはなかった。／「ちょうどいい（ちょうどよく）」という言葉を保育の中で用いることは多いものの、そこに明確な基準はなく、あいまいなものになっていたためテーマに興味を持った。／保育者が保育の中で行う「援助の加減」をイメージした。

多様な視点を持たれた先生方とお話をする中で、私たちも新たな視点を持つこととなりました。その1点目は、乳児期に経験する「ちょうどいい」体験についてです。乳児期に「心地よい（ちょうどいい）」環境を与えられた生活経験がその後、感覚的にちょうどよさを見つけ出す「経験知」の基礎となるのではないかという視点です。まだ自分の思いを言語化することが出来ない段階での「心地よさ」は引き続き研究をする上で必要な視点となることを感じました。そしてもう1点は、「ちょうどいい」という線引きについてです。「ちょうどいい」のラインを超える経験があるから「ちょうどいい」が分かるようになるのか、そのラインを超える経験が無いとしても子ども達は「ちょうどいい」を感じ取ることが出来るのか？という視点です。

2つの視点は、感覚的には気に掛けられていたものの、研究の重要な視点とはなっていませんでした。今回の発表と先生方との話し合いの結果を精査し、今後の保育に活かしていきたいと思います。

第4章 実践学会当日と次回開催に向けて

《第16回幼児教育実践学会 開催の様子》



【基調講演】



【園内研修のメイキング】



【口頭発表】



【ポスター発表】

《第17回幼児教育実践学会 開催予告》

日 時：令和8年8月20日（木）・21日（金）

場 所：京都・京都華頂大学

その他：令和8年2月に第一次案内を発信予定です

おわりに （一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 教育研究委員長 岡本 潤子

小学校以上の学校種とは異なり、幼児教育はその教育の姿に特殊性があり、「あそびは学び」という教育の豊かさに伝わりづらいものがあります。その一方で、世界的にはエビデンスを基に幼児教育の重要性が謳われ、世界は教育施策を通して幼児教育の質向上に向かう中、（一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構は、『幼児教育の実践を豊かにし、幼児教育の有用性を社会に示すことで、子どもの育ちが最優先される社会が実現されることを目指し』2010年、幼児教育実践学会を立ち上げ今日に至っています。肝は『実践の豊かさ』。保育者にとっては当たり前のことですが、この当たり前の実践が、幼児教育を支え未来を拓くものに。熱気あふれる会場内で渦巻くものは、『こどもと共に生きる喜びと豊かさ』を実感している私たち保育者の語り合いから生まれる笑顔。実践発表に対する意見や感想を互いに語り合う中から生まれるその熱量こそが、幼児教育の質向上に向かうバロメーターであり、幼児教育の重要性を社会に示す力になっています。

このたび、これまでの本学会運営の実績を踏まえ『幼児教育実践学会学会誌』を創刊することにいたしました。この実践を支える多くの研究者の皆様と共に、人間教育の基礎を培う幼児教育の重要性を社会へ届けていきたいと考えています。この学会誌を開くと、子どもたちの笑い声が聞こえ、保育者の思いと願いが軽やかに吹き込み、研究者の視点が日の光となって差し込むものであることを期待しています。



ECEQ[®]から生まれた多様性を認め合う関係性 ～ぴちぴちミーティングの活躍を通して～

3回目となる本号でも、ECEQ[®]を実施した園の先生へECEQ[®]を実施していく中で分かったこと、その後の変化についてご執筆いただきました。特に本号では1年目から5年目の若い保育者の活躍に焦点を当ててECEQ[®]を通してどう取り組みを行ったのかご紹介いただいています。

山王幼稚園 園長／関口 智行

1. 目の前の課題と向き合う

ECEQ[®]による公開保育を実施する園は何かしらの変化を期待して各ステップを迎えるのではないかと思います。私の園では、ステップ1でのトップリーダーヒアリングの中で「1年目から5年目の若い保育者の活躍」を促すことが共通の願いでした。トップリーダーは若い保育者達がベテランの保育者の指示を待つ傾向があり、保育に主体的に参加していないと考えていました。

私の園は幼保連携型認定こども園で、0歳から6歳までの子ども達が240人程在籍し、保育者はパートも含めて45人程、各学年主任は20年以上の経験があるベテラン保育者が担当し長年固定化されていました。そんな中でも、一人ひとりの意見を聞けるよう、付箋を使った対話的な会議を行い、保育者の主体性を促す努力を積み重ねていました。



STEP2グループワークの様子

コーディネーターの先生からの提案で、ステップ2では、話し合うグループを経験年数ごとに分けることになり、園の良いところ、課題とその理由、どんな園にしていきたいか付箋を使って話し合いが行われました。すると、経験年数が少ない若手の先生達のグループから「何のために行事をするのかかわからない、どこまで子どもの主体性を尊重するのかかわからない」など保育への不安や園に対する不満が表出したのでした。この結果を受けて

私や副園長、主幹、学年主任達も大変なショックを受け、肩を落とし、途方に暮れていたのを今でも覚えています。

ステップ3の問いづくり、ステップ4の公開保育で、若い保育者の悩みを問いに反映させたり、当日の保育説明を若手の保育者に任せたり、なるべく若い保育者が主体的にECEQ[®]に参加できるような配慮をしたことで、各ステップを乗り越えながらベテランと若手の間にお互いを尊重し合う仲間意識が芽生えてきたと感じました。ステップ5で公開保育の振り返りを行いコーディネーターの先生はいくつかの行動目標を、グループごとに発表させ、園長である私が行動目標を実施するかどうか職員の前で約束する時間を持ちました。これは私の願いでもありました。この行動目標の中の1つに「若い保育者の親睦を深め、意見交換できるような会を発足させる」ことがありました。凡そ10人程で構成されるこの会は自らを「ぴちぴちミーティング」と名付け、名前の新鮮さ、異質さから、注目の的となっていきました。



STEP5公開保育の振り返り

2. ECEQ[®]後の変化

「やって良かったECEQ[®]」と言われるように、公開保育に対してポジティブなフィードバックをたくさんいただき、特に若い保育者は自信を得たように感じました。しかし、園内の人間関係やシステムはそう簡単に変わるものではなく、元に戻ろうとする揺れ戻しの中で、異質な「ぴちぴちミーティング」は担当のコーディネーターの先生にお墨付きをもらい若い保育者が活躍する場を守り続けていきました。

当初、ぴちぴちミーティングは主体的に活動することができなかったのも、若い保育者同士の懇親会を行い、

親睦を深めさせたり、職員研修旅行で親睦会の進行を任せたり、園の課題を話し合ってもらいました。次第に若い保育者が主体的に考えを述べる雰囲気ができ、多様性を認め合うインクルーシブ保育へと保育の転換を図るタイミングで、若い保育者の新しい発想をととても頼もしく感じられるようになりました。ぴちぴちミーティングから2人の学年主任が誕生したことはECEQ®の象徴的な成果だと思います。



当園の「ぴちぴちミーティング」の様子

令和7年度に入り、新規採用職員2名とぴちぴちミーティングのメンバーによる園内研修を任せ、働くことでどんな喜びがあり、またどんな苦勞があったかなど共有してもらうことで、新規採用者の不安を和らげ、若い保育者同士の育ち合う関係性が芽生えたように感じました。また、ぴちぴちミーティングで、新たに保育への不安や積極的に評価してほしいという願いがあることが分かり、4年目までの保育者に1人ずつメンターをつけ、ベテラン保育者と若手が相互に育ち合うメンター制度を導入し、どのような成果があるのか検証しているところです。



Hot News

Vol.5



令和7年8月20日に第16回幼児教育実践学会の口頭発表にて「ほんとにいいの？ ECEQ®～現場は語る～」と題しておこなった発表を、この度オンデマンド研修として配信することとなりました。

そこでは実際にECEQ®を実施した園の先生方を3名お招きし、現場の教職員のECEQ®実施までに感じていた不安、実施中の苦勞、実施後に園内で見られる変化などをリアルな声とともにお伝えしています。さらに武蔵野大学教授の箕輪潤子氏をお招きし、実施園の先生方のお話を受けて、研究者の目線から見たECEQ®実施についてお話をいただきました。

ECEQ®のSTEP 1～5の説明も研修内で行っていますので、ECEQ®について興味はあるがよく分からないといった方にご受講いただきたい内容となっています。

ぜひご受講をご検討ください。

※ 教職員登録のうえ、ゆたかなまナビよりお申し込みください。



【お申込みはこちら】

私たちは幼児教育用品を通じ、幼児教育の質の向上に貢献します。



フレーベル館



令和7年度第3期オンデマンド研修32コンテンツが新たに加わりました

オンデマンド研修概要

- 申込期間：～令和8年2月26日（木）17時 ●配信期間：～令和8年2月27日（金）17時
- 申込方法：教職員登録のうえ、ゆたかなまナビよりお申込ください。
- 研修スタンプ：研修受講後、3択5問の設問に回答し、80%以上の正解で研修スタンプを取得することができます。（追試は2回まで）
- 受講料：研修によって異なります。ゆたかなまナビでご確認ください。
- 支払方法：クレジットカード決済／コンビニ決済
- その他：本研修は、施設型給付費等に係る処遇改善等加算及び、私立高等学校等経常費助成費補助金（一般補助）交付要綱別表第2の3の事由に基づく「幼稚園教員等の人材確保支援分」のうち、「幼児教育の質の向上のための処遇改善」に係る研修（私学助成園を対象とした処遇改善の要件に対応した研修）です。



	講演名	講師名／肩書	時間数	俯瞰図番号
NEW	多様な子どもたちと向き合うためには何が必要なのか？	佐藤 一光（東京経済大学経済学部 教授）	1.5	A1
NEW	災害対策における行政や地域社会との連携について	木宮 敬信（常葉大学教育学部生涯学習学科 教授）	1.5	A3
NEW	「ほんとにいいの？ECEQ®～現場は語る～」	箕輪 潤子（武蔵野大学教育学部幼児教育学科 教授）、阿部 能光（認定こども園いぶき幼稚園 園長）、杉本 圭隆（むつみこども園 園長）、伊藤 ちはる（福島めばえ幼稚園 副園長）、櫻井 喜宣（さくらい幼稚園 園長）、池亀 千夏（念法幼稚園 教諭）、菅野 祐輔（聖和幼稚園 教務主任）、内山 敏和（かもいようちえん 副園長）	1.5	B2
NEW	第一部：基調講演①「『幼児教育の重要性と質の評価について』～時代の流れの中で～」②「『園の特色と保育実践のつながりを考える』～保育の質と保育者の専門性～」 第二部：パネルディスカッション「『園を開く、保育を拓く、学びをひろく』～語り合いでつくる、わたしたちの園～」	第一部：①野澤 祥子（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 特任教授）、②箕輪 潤子（武蔵野大学教育学部幼児教育学科 教授） 第二部：野澤 祥子（東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 特任教授）、箕輪 潤子（武蔵野大学教育学部幼児教育学科 教授）、奥水 基（認定こども園阿久根めぐみこども園 園長）	第一部：1.5 第二部：1.0	第一部：B5 第二部：E7
NEW	ひとりの“やってみたい”から広がる学び—廃材造形活動を通して見た年少から年中への育ち—	中ノ子 寿子（尚絅大学短期大学部幼児教育学科 助教）、宇梶 達也（荒尾第一幼稚園 園長）、松川 夏海（荒尾第一幼稚園 教諭）	1.0	B5
NEW	5歳児（子どものやってみたいから生まれた『きらきらミュージアム』）～子どもと保育者と保護者とのつながりとは～	田島 大輔（和洋女子大学人文学部こども発達学科 助教）、名倉 一美（佐賀大学教育学部幼小連携教育コース 准教授）、高田 美波（佐賀女子短期大学付属ふたばこども園 保育教諭）、村岡 直子（佐賀女子短期大学付属ふたばこども園 副園長）	1.0	B5
NEW	保育者同士の対話を通じた多面的な子ども理解～保育観の芽吹き、深まり～	安達 譲（大阪教育大学 非常勤講師）、谷邨 由麻（せんりひじり幼稚園 教諭）、堀内 梨乃（せんりひじり幼稚園 教諭）、福岡 加菜（せんりひじり幼稚園 教諭）	1.0	B5
NEW	預かり保育における現状と課題～子どもにも大人にも「ちょうど良い時間」を目指して～	境 愛一郎（共立女子大学家政学部児童学科 准教授）、古川 智規（認定こども園立花愛の園幼稚園 フリー主任）、森 陽一（認定こども園立花愛の園幼稚園 副園長）、大山 絵里奈（認定こども園立花愛の園幼稚園 年少主任）、濱名 潔（認定こども園立花愛の園幼稚園法人本部 副本部長）、濱名 浩（認定こども園立花愛の園幼稚園 園長）	1.0	B5
NEW	地域に応じた園における持続可能な開発のための教育（ESD）の実践	仙田 考（田園調布学園大学大学院人間科学部子ども人間学専攻 准教授）、内野 彰裕（東京ゆりかご幼稚園 園長）、白野 未侑（認定こども園七松幼稚園 保育教諭）、勝見 慶子（認定こども園エンゼル幼稚園 副園長）、亀山 秀郎（認定こども園七松幼稚園 園長）	1.0	B5
NEW	質向上や働き方改善に向けた生成AI等の活用による保育記録一音声入力・保育カンファレンス・個別帳票・月末メッセージ—	高橋 健介（東洋大学福祉社会デザイン学部子ども支援学科、ライフデザイン学研究所生活支援学専攻子ども支援学コース 准教授）、木村 創（認定向山こども園 副園長）、渡邊 祐貴（認定向山こども園 保育教諭）、上石 恭太（上越教育大学附属幼稚園 非常勤講師）	1.0	B5
NEW	豊かな感性育てを目指す実践の振り返りから架け橋期への願いと試み	平野 良明（札幌国際大学 名誉教授、北海道教育委員会幼児教育推進センター アドバイザー）、中山 敦子（大地太陽幼稚園 園長）、前園 和寿（大地太陽幼稚園 教頭）、高橋 春香（大地太陽幼稚園 主任教諭）	1.5	B5
NEW	表現を支える保育者のまなざし～一人一人の良さがつながる表現活動を通して～	井内 聖（北海道文教大学 客員教授）、渡邊 日向子（恵庭幼稚園 年少学年主任）	1.0	B5
NEW	帰巢性を育む保育～4年間続き続けた「つながる」保育の軌跡から～	門田 理世（西南学院大学人間科学部児童教育学科、人間科学研究科 教授）、岡田 朱紀（認定こども園白梅幼稚園 園長）、村山 祐子（認定こども園白梅幼稚園 副園長）、岩崎 ちどり（認定こども園白梅幼稚園 保育教諭）、池田 美貴（認定こども園白梅幼稚園 保育教諭）	1.0	B5

	講演名	講師名／肩書	時間数	俯瞰図 番号
NEW	乳児の情緒の揺れについて	安家 周一（梅花女子大学心理こども学部こども教育学科 教授）、影山 佳代（あけぼの保育園 園長）、宮脇 知紘（あけぼの保育園 リーダーチーフ）、松尾 実佑子（あけぼの保育園 チーフ）、武井 雛莉（あけぼの保育園 保育士）	1.0	B5
NEW	『園』の『庭』に溢れる、『好』きと『奇』なるものに躍る『心』～未来は僕らの庭の中～	岩崎 巧（森のあそびば はれのちはれ 代表、桃山学院大学 非常勤講師）、三倉 敏浩（あけぼのぼんぼこども園 園長）、湯浅 優典（せんりひじり幼稚園 学年主任）	1.0	B5
NEW	学童保育と預かり保育を通して見えた 子ども達の心の育ち	渡邊 堯宏（北海道文教大学人間科学部こども発達学科、北海道文教大学大学院こども発達研究科 准教授）、大塚 武（はやきた子ども園 学童支援員）、吉田 圭介（はやきた子ども園 学童支援員）、伊藤 未来（恵庭幼稚園 教諭）	1.0	B5
NEW	大人もこどもも【いきるとは】を考える	田中 住幸（札幌大谷大学短期大学部保育科学科長 教授）、司馬 政一（幼保連携型認定こども園せいめいのもり 園長）、田口 詩織（幼保連携型認定こども園せいめいのもり 乳児部リーダー）、仲山 夢乃（幼保連携型認定こども園せいめいのもり 教諭）	1.5	B5
NEW	トップリーダー同士がトップ・マネジメントの実践について学び合う場づくり	秦 賢志（大阪教育大学 講師）、阿部 能光（認定こども園いぶき幼稚園 園長）、船瀬 紗代子（幼保連携型認定こども園西須磨幼稚園 副園長）、北島 孝通（幼保連携型認定こども園庄内こどもの杜幼稚園 園長）	1.5	B6
NEW	「保育の地平へ」乳幼児期から小学校への育ちの連続性	安家 周一（（一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構 理事長）	1.5	C2
NEW	中等・高等教育の本質から見通す幼児教育の未来—子どもの健やかな育ちの現在と未来を考える—	大澤 力（東京家政大学大学院人間生活学総合研究科児童学児童教育学専攻、人間生活学専攻 客員教授）	1.0	D1
NEW	記録の重要性 その方法と活かし方	伊藤 ちはる（福島めばえ幼稚園 副園長）	1.5	D2
NEW	気になる子どもへの関わり方～親子を支えるためにできること～	今村 幸子（鹿児島女子短期大学児童教育学科 講師）	1.5	D3
NEW	自ら気づいて動ける園児を育てるクラスづくりと気になる子への対応	福岡 寿（日本相談支援専門員協会 名誉顧問、厚生労働省障害支援区分運営適正化委員会 座長）	1.5	D3
NEW	特別なニーズを持つ親子の心理と支援 対象の広がりに応じる教育・保育	伊藤 千裕（株式会社東京ソーラー 心理士、（公社）静岡県私立幼稚園振興協会 子育て支援カウンセラー 他）	2.0	D3
NEW	デジタル時代の幼児教育—保育に活かす生成AI—	湯地 宏樹（鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授）	1.0	E4
NEW	園のよさ・思い・願いをつなぐ園内研修と評価	箕輪 潤子（武蔵野大学教育学部幼児教育学科 教授）	1.5	E7
NEW	保幼小の連携・接続・架け橋プログラムの理解	松崎 洋子（明治学院大学心理学部教育発達学科 教授）	1.5	F1
NEW	保護者のクレームの扱い方	小崎 恭弘（大阪教育大学健康安全教育学系教育学部教員養成課程家政教育部門 教授）	1.5	F1
NEW	□頭発表「こどもの困り感に焦点を当てた個別の援助について～就学相談に向けた保育と療育の連携～」、基調講演「『個性をいかして豊かに生きる』～感覚統合療法の視点から～」	□頭発表:小川 瞳（久留米天使こども園 保育教諭）、早川 成（久留米天使こども園 園長） 基調講演:土田 玲子（NPO法人なごみの杜 代表理事、日本感覚統合学会 前会長 他）	2.0	F1
NEW	幼保小の連携・接続～豊かな幼児期の教育を小学校教育につなぐために～	福田 洋子（（公社）全国幼児教育研究協会 茨城支部長、茨城県幼児教育アドバイザー）	1.5	F1
NEW	子どもが育つまちをつくる～園が持つ役割と可能性～	井内 聖（北海道文教大学 客員教授）	1.5	F3
NEW	先生こそ知りたい「対話によるアート鑑賞」とは？	大森 久美（静岡聖光幼稚園 アトリエリスト）	1.0	F3

**保育施設
導入実績 No.1**

IP無線機 伝シリーズ
— ニシハタシステム —

災害対策で
2,500園以上が導入!



**園業務のお悩みを
IP無線機で解決!**

無料お試し実施中!

0120-775-956
株式会社 ニシハタシステム

